

薬師寺の調査（平城第474・475次調査）

薬師寺では、各所に防災設備を設置するため、昨年度より発掘調査がおこなわれています。

第474次調査では、薬師寺の東面回廊附近から東に向かって、逆L字形の調査区を設定しました。南北トレンチは長さ約14mで、幅は1m部分と2m部分があります。東西トレンチは幅2m、長さ36mです。調査期間は8月16日～10月21日でした。

これまでの調査・研究では、調査区の北側に僧房を確認しており、この僧房の南側の状況はわかっていませんでしたが、今回の調査の結果、池や排水にかかわる東西溝を発見しました。

池の範囲では、自然木や松ぼっくりの混じる層があり、その下層には池の堆積、池底には水草の堆積がありました。このことから池の周囲には松がたくさん生えていたものと考えられます。また、このあたりで利用できる土地を拓げるために、池岸を何度も改修して陸地を増やしたり、池を埋めて東西溝を掘って排水するなど、知恵を絞った様子が窺えます。

池の西岸では幅約2mの瓦溜りを発見しましたが、建物に伴うものであるかについてはわかりません。

今回の調査では僧房南側の建物の存在は確認できませんでしたが、回廊の東側からわずか20mほどしかない伽藍中心付近まで池が広がっていたという、かつての姿を垣間見ることができました。



平城第474次調査瓦溜り（東から）

第475次調査は、薬師寺休ヶ岡八幡宮の裏手における発掘調査で、10月5日～11月2日まで調査をおこないました。

八幡宮の裏手は竹林ですが、社殿の側に切り通しをもつ南北の小道があります。路面には遺物包含層および地山がすでに露出した部分があり、このため路面の精査から調査を開始しました。調査成果は次のとおりです。

道路を東西に断ち割るかたちで調査をおこなったところ、地山が社殿のある西側に向けて高くなっていることがわかりました。八幡宮の創建は9世紀末のことですが、社殿がやや小高い丘の上を選んでいることが考えられます。

地山は白色シルトないしは橙色砂礫層ですが、道路の東側にもすでに露出しています。しかし、道路部分では社殿側（西側）の高所から約1.3m低いレベルでようやく地山を確認しました。あいにく調査範囲が狭く、全容を明らかにできませんが、切り通しまたは素掘り溝と考えられます。

なお、このくぼみは、奈良時代前半の土器を含む包含層が幾重にも重なることで埋没しています。したがって、その開削は少なくとも奈良時代以前のこととみられ、八幡宮以前の地形改変を考えるうえで貴重なデータを得ることになりました。

（都城発掘調査部 海野 聡・清野 孝之・森川 実）



平城第475次調査風景（南から）